

生活協同組合による過疎地域への大型店舗出店事業の可能性

—コープさっぽろ「あかびら店」に注目して—

正会員 ○相場 奈津子*

同 森 傑**

過疎地域 大規模小売店舗 社会的企業
 ビジネスモデル コミュニティ 公共性

1. 背景と目的

生活協同組合コープさっぽろは、過疎地域における事業展開を始め、平成21年2月27日に赤平市に大規模小売店舗を出店した。いわゆる少子・高齢化の著しい過疎地域において、4,000 m²以上の大型店舗を新たに構えることは非常に稀であり、この試みはマスメディアに採り上げられ、道外からも注目を集めている。

コープさっぽろのビジネスモデルは、町の中心に大型店舗を出す場合、通常は競合性から地元の商店組合から反発を受けるところを、福祉サービスの提供を積極的に提案することで住民からの期待と協力を引き出し、結果的に自らの安定した顧客確保と収益向上に繋げるものである。

本研究は、北海道赤平市にあるコープさっぽろ「あかびら店」の事業プロセスと立地特性を分析し、過疎地域のコミュニティ賦活へ向けての大規模小売店舗の社会福祉的な可能性を展望することを目的とする。

2. コープさっぽろ「あかびら店」の立地特性と概要

赤平市は北海道空知支庁中部・空知川流域に位置する市である。かつて石炭産業で栄え、最盛期には59,430人の人口を擁した町であったが、その衰退により人口は激減し、現在では13,000人弱となっている、いわゆる過疎地域である。

出店敷地は、廃校になった旧赤平小学校の跡地であり、市立赤平総合病院と赤平中央中学校に隣接している。また、中心市街地に位置しており、周辺には他にも、JR赤平駅や図書館、総合体育館といった市の主要施設が集積し、いずれも同店から徒歩圏内にある。また、赤平中央商店街という商店街とやすらい通りと呼ばれる飲み屋街があり、かつては商業集積地でもあった。

同店では、市内各エリアを結ぶ無料買物バス「トドック号」(図1)が導入され、買物の足としてだけでなく、市立病院への通院手段としても広く市民に利用されている。

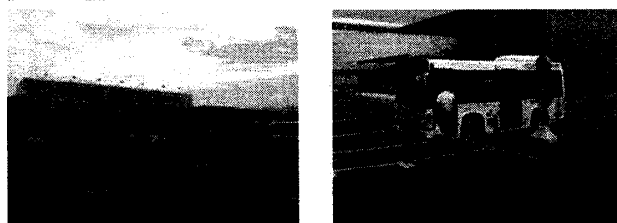


図1 店舗外観(左)と無料買物バス「トドック号」(右)

3. 開店までの経緯と背景(表1)

市内では、以前にもコープさっぽろの店舗が営業していたが、平成14年に撤退して以来、空白となっていた。赤平市は、コープさっぽろが平成19年4月に出店を持ちかけた際に、現敷地の他に、中心市街地からはやや離れたバイパス沿いにあった空知炭坑跡地を紹介した。現敷地は、同年3月31日付で赤平小学校が廃校になって以来、未利用地だった。コープさっぽろ内での議論の末、現敷地に出店地を決定した。5月には、商工会議所の賛成も得られ、6月には、市の定例会にて土地売却が議決され、仮契約、本契約へと進んだ。1ヶ月半に渡る校舎解体工事を終えて、店舗施設工事は着工し、翌年の2月27日に開店した。その間には、市内で以前から営業していたニッショウマートがイオングループのマックスバリュとしてリニューアルオープンした。

表1 コープさっぽろあかびら店の開店までの経緯

日付	項目
平成14年	コープさっぽろ撤退
平成19年 3月31日	赤平小学校閉校
4月	コープさっぽろの土地取得打診
	赤平小学校跡地に建設決定
5月	商工会議所の賛成
5月23日	役員会にて開発提案
6月	市の定例会にて、土地売却議決
6月13日	仮契約
7月10日	本契約
7月23日—9月10日	校舎解体工事
10月22日	地鎮祭
11月	店舗施設工事着工
平成20年 2月10日	ニッショウマートがマックスバリュとしてリニューアルオープン
2月27日	開店

3-1. 赤平小学校跡地活用について

敷地である旧赤平小学校およびその校舎は、昭和36年に文部省公立学校施設整備に係る国の補助を受け、赤平双葉中学校として同年竣工し活用していた。

しかし、石炭産業が衰退する中で人口の流出が加速し、昭和52年度より隣接している中学校と他校を移転統合し

旧双葉中学校を赤平小学校として活用することとした。その後も、石炭産業の情勢は好転することなく、これに合わせて中心市街地の商業地区も衰退し、さらに過疎化が進んだ。赤平小学校は、市の中心市街地を校区としていたことから、このような経済情勢のあおりと近年の少子化の影響を受け、児童数は年々減少し、平成19年3月31日付で廃校となった。

市は、グランドを含めた廃校後の施設利用について検討していたところであったが、財政状況の悪化により、除却費の捻出することが困難であった。また、赤平小学校は国の補助によって建てられたために、国庫納付金が発生するという問題もあった。

3-2. ステークホルダーとの関係

(1) 赤平市

赤平市副市長浅水氏によると、当初、地域住民や商店街、商工会議所からは、中心市街地の人口減少から、赤平小学校舎を除却した後に、住宅を建ててはどうかという意見があったが、市は、周囲に商店街がなければ(住宅があっても)生活するのに困ると考え、平成19年度の1年間は跡地を廃校時のままの状態にしていた。

そして、その後の平成20年には、住宅は建てないという方針が決まった。跡地周辺には病院や介護施設があるので、それらの延長線上で何かに使えればよいと考えたが、当時の市の財政状況では校舎の除却には何千万と費用がかかるため、何年後に壊し再活用できるかは全く見当がつかなかった。そのため、今回のコープさっぽろの出店は実に良い機会だったと赤平市は捉えている。

(2) 赤平市商工会議所

同店の出店地は、中心市街地であり周囲に商店街があるため、コープさっぽろは商工会議所に行き、計画を説明し、同意を得ようと試みた。商工会議所では、コープさっぽろは多種多様な商品を扱っているため、既存の商店街との競合という問題もあるのではないかという話もあったが、当時の中心市街地は、顧客を近隣市における郊外の大店に奪われて空洞化が進んでいたため、コープさっぽろの出店は、赤平市はもちろん、近隣市町村からも顧客が来て、商店街が活性化するビジネスチャンスとして有効であるという判断が下された。

4. 店舗及び無料買物バスの利用実態

4-1. 待合コーナー

店舗内の一画には、無料買物バスを待つことができる待合コーナーが設けられており、テレビや飲み物が備えられてある(図2)。コープさっぽろ開発地区渉外部長の稲垣氏によると、当初は投資コストを抑えるために坪数を小さくする努力を行っていたが、後にバスを走らせるこ

とが決まっていくなかで、バスの待合コーナーをつくることが提案されたという。

待合コーナーでは、午前中から昼にかけては利用者の大半が高齢者で、一緒に来店していなくとも、偶然待合コーナーで出会い、そのまま会話をするケースが多く見られる。夕方になると、地元の中学生が、周辺の総合体育館で遊んだ帰りに間食をしたり、談笑したりするために集団で利用している光景が見られる。このように、待合コーナーは地域住民の交流を支える核となりつつある。



図2 待合コーナーの様子

4-2. 無料買物バスの利用実態

平成22年4月現在、無料買物バスは2路線往復7便を1台で巡回している。乗客は降車時に組合員証を提示することになっており、コープさっぽろは、バスの運行の負担増は、集客増による増収効果でまかなえるとみている。

注目すべきは、同店の開店時刻は午前9時であるのに対して、無料買物バスの始発は午前8時30分には店舗に着くように運行している点である。この始発を利用する人の大半は、午前8時半から開始する総合病院の外来に向かう。

5. 地域賦活のための公共建築の再構成と社会的企業論

小学校跡地を利用したコープさっぽろの事業展開は、公共建築の再構成と更新だと捉えることができる。

社会的企業論の観点から、過疎地域の賦活へ向けての大規模小売店舗の公共的可能性を展望したい。過疎地域は、少子高齢コミュニティをいかに維持・賦活していくかという問題に直面しているが、財政難を抱え、夕張市のように財政破綻する地方自治体もあるなか、新たに公共サービスや公共建築を整備することは不可能に近い。そのような中で、PFIのように、民間企業が自治体の肩代わりとなるアプローチがこれまで多く行われてきたが、従来のこのような受動的アプローチではなく、営利ビジネスモデルに組み込まれた公共サービスの提供という能動的アプローチは、今後の過疎地域の地域賦活へ資する現実的・実用的方策として有意義であると考えられる。

参考文献：

- 1) 北海道新聞：コープさっぽろが無料バス、北海道新聞、2008.9.26
- 2) 谷本寛治：ソーシャルエンタープライズ—社会的企業の台頭、中央経済社、2006.1

*北海道大学大学院工学研究科 修士課程

**北海道大学大学院工学研究院 教授・博(工)

*Graduate student, Graduate School of Eng., Hokkaido Univ.

**Professor, Faculty of Engineering, Hokkaido University. Ph.D.in Eng.